

〔13〕ベジヤール振付『ザ・カブキ』

～異化するカ～

1991年8月2日 東京新聞 夕刊

舞踊が与える感動の最たるものは異質の文化との出会い、その衝撃によるのではないかと、このところ考えている。たとえば今世紀の初頭、ディアギレフ率いるロシア・バレエ団が西ヨーロッパの人間にあれほどの人気を博したのは、もともとフランスのものだったバレエが、ほとんど未知のアジア的、イスラム的風土を表現していたからだ。ニジンスキーの踊る『牧神の午後』や『シエラザード』は東洋と西洋のなんとも絶妙な融合であって、そこに開かれた新しい地平に人々はめくるめく思いを味わったのである。

いつもそうだが、そうしたためくるめきは賞賛と非難を二つながら引き起こす。そしてスキヤングルの渦をくぐりぬけた後に普遍性を・獲得し、芸術そのものを大きく前進させる。

そのことは現在でも変わっていない。たとえばモーリス・ベジヤールのバレエ『ザ・カブキ』が初演されたのは五年前のことであるが、日本国内ではあまり肯定的な意見は聞かれなかったように記憶している。というよりは、ほとんどの観客がもとの歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』にひきずられて、バレエ作品として評価しれなかったと言うべきだろう。

● 異質の精神から

『ザ・カブキ』の幕開けはロックを伴奏に描き出される現代日本の青春群像だ。ひとりの若者が過去の「忠臣蔵」の世界にタイム・スリップしていく。現代バレエと歌舞伎との二重構造に加えて、過去と現代とが重なり合

〔13〕ベジヤール振付『ザ・カブキ』

～異化するカ～

1991年8月2日 東京新聞 夕刊

う。

純然たる日本人の立場（といっても、いまどきそんなものが存在するかどうか、まことに疑わしいかぎりだが）に立てば、これはひとつのカリカチュアでしかない。たしかに『仮名手本忠臣蔵』と相似の場面が展開する。しかし女たちは着物の前をはだけ、時には打掛のようなものをすりと脱いで、ボディ・タイツ姿で踊り始める。思わずある種の風俗営業のショーを連想してしまう。また男たちのすり足は当然ながら腰が高く、動きが軽く（彼らはバレエダンサーなのだ！）歌舞伎のどっしりとした体の構えに遠く及ばない。

これは歌舞伎ではない、忠臣蔵ではない、そう言って切り捨てるのは造作もないことだ。しかしそのような同一文化の内部に固定された観点からこの作品を見ることに、いったいどれほどの意味があるだろう。『ザ・カブキ』が面白いのは、それがまったく外部から、大きな距離をおいて、しかも質的に異なる精神によって眺められた「忠臣蔵」、そして日本であるからだ。これは、見慣れたものに新しい照明を当てて、いうならば「異化」する、きわめて知的なゲームなのである。

そのような考え方でバレエ『ザ・カブキ』を見直してみると、これはまことに優れた日本論である。ベジヤールという肉体造型の天才の眼に映ったわが伝統芸能は、いわゆる歌舞伎通の「正しい見方」などおよびもつかない観点からとらえ直されて、その本質をさらけ出す。異なる舞踊の規範、異なる舞台芸術上の美意識によるものでありながら、まぎれもない「カブキ」、現実の日本以上の「ザ・ニホン」なのである。

〔13〕ベジヤール振付『ザ・カブキ』

～異化するカ～

1991年8月2日 東京新聞 夕刊

しかも舞踊というのは言葉や理屈ぬきで直接眼に訴えるから、なおのこと衝撃は大きい。装置の形や色、着物のあつかい、体の動かし方などに多くの発見があつて、時に眼からウロコが落ちる思いをする。日本の外での公演より、本当は歌舞伎好きの日本人のほうがもっと楽しめるのではないだろうか。というのも、もとの素材と新しい解釈の、その双方が近づき遠ざかりして絡みあうさまが、はつきり分かるからである。

● バレエの秘密

二〇世紀のあいだに、バレエはきわめて普遍性の高い、国際的な芸術に成長した。その普遍性の秘密はといえば、バレエ芸術がものごとを「異化」するという機能を備えていたことによるのではないか。というのも、もともと芸術というのは人間の個性の発揮の場であつて、はじめから普遍的なもの、国際的なものなど存在しえないからだ。個別的に存在していたものが広い視点からその本質をとらえ直され、普遍的な性格を持つにいたるのが筋道である。そういう意味ではバレエもまた、その起源から現在にいたるまで、ありとあらゆる文化を「異化」しつつ普遍に変えるという作業を丹念に重ねる以外のこととしてはこなかったとも言えるのである。